

追悼

林長閑先生のご逝去を悼む

日本の甲虫類の幼虫研究の先覚者として活躍された林長閑先生が2013年（平成25年）5月29日未明に、肺炎でお亡くなりになりました。享年84歳でした。謹んでご冥福をお祈りいたします。

先生は、1928年（昭和3年）10月20日に、林純之介さんの三男として兵庫県芦屋市でお生まれになりました。ご尊父は、蛾を熱心に研究され、当時の蛾の権威、丸毛信勝先生に師事されていた方で、甲虫の大家の三輪勇四郎先生とは同郷（四日市）で親交がありました。先生は御尊父からは三輪先生の話をよく聞かされたそうです。

幼いときに兵庫県から東京（自由が丘）へ転居され、目黒区の小中学校に通われましたが、このころにはすでに甲虫に興味をもたれ、近くの雑木林にクワガタやカブトムシを探しによく行かれたそうです。御尊父から昆虫の本を買っていただいたり、昆虫採集に連れて行ってもらったりしたことから、クワガタ以外の甲虫にもしだいに興味を持つようになられました。高校は虫好きであったことから、自宅近くの東京府立園芸学校（現・東京都立園芸高等学校）へ進学されましたが、このとき「虫好きがすっかり病みつきとなった」と先生の著書「甲虫の生活（築地書館）」の中で述べられています。

高校を卒業した先生は、昆虫の研究ができる東京農業大学農学部農学科に進学され、昆虫研究室に籍を置かれました。1951年3月に卒業になり、翌年の4月には川崎市の法政大学第二高等学校に奉職され、1990年3月末で退任されるまで38年間生物の教鞭をおとりになりました。在職中はボート部や生物部の顧問を務められ、昆虫の研究者を育てることに尽くされました。学外では、文化財害虫研究所理事、日本ホテルの会理事などを歴任されるなど、さまざまな方面で活躍されました。

法政大学第二高等学校を退職後は、1991年から1998年まで、東洋大学で非常勤講師を務められる傍ら、在職中から関わってきた川崎市の青少年科学館の活動を支援されました。「かわさき自然調査団」では、理事を務め、出版物の編集や執筆に携わるなど、地域の自然環境の解明に尽力されました。

先生は当初より甲虫類の幼生期に興味をもち、東京農業大学に在籍中の1948年に「コブスデゴミムシダマシの幼蟲と蛹」というタイトルの論文を生態昆虫に公表されています。これが先生の最初の論文で、その後も甲虫の幼生期や生態に関する学術的に重要な論文を多数公表されました。シバンムシの仲間の分類にも興味を持たれ、1954年に2編の論文を公表され、あわせて1新属4新種を記載されています。

1960年3月には、北海道大学に「ヒラタムシ上科幼虫の研究」という論文で学位申請し、翌年に農学博士の学位を取得されました。この学位論文の一部は、*Insecta Matsumurana* やその *Supplement* の誌上で公表され、内外から高い評価を得ました。先生はその後も、幼虫の研究を進められ、1977年4月から1年間、法政大学付属高校の国内研修制度を活用し「鞘翅目ケシキスイムシ科幼虫の研究」に専念されました。その成果は「A contribution to the knowledge of the larvae of Nitidulidae occurring in Japan (Coleoptera: Cucujoidea)」という表題の論文にまとめられ1978年に公表されています (*Insecta Matsumurana, New Series, 14: 1-97*)。

先生は虫と人とのかかわりについて考える「文化昆虫学」の分野においても、強い関心を持たれた方でありました。1987年度には、法政大学第二中・高等学校の教養学校で「ヒトと甲



横浜市港北区菊名のご自宅にて（平成18年正月）

虫」という講座を開講され、「社会と甲虫」や「文学や芸術と甲虫のつながり」についてお話をされています。この講座の内容は、翌年に同「ヒトと甲虫」という表題で1冊の本にまとめられています（法政大学出版）。

2013年3月中旬に印刷発行された「List of publications of Dr. Nodoka Hayashi 林長閑記述目録1948-2007」によりますと、先生が公表された昆虫に関する著作は、論文が186編、単行本・雑誌が61編、図鑑・事典が13編、そして随筆が12編で、その大半が甲虫の幼虫の形態や分類、そして生態に関するものです。先生がとくに力を入れられていたのは、学位論文を含むヒラタムシ上科幼虫の一連の研究「Contributions to the knowledge of the larvae of Cucujoidea I-XI (1963-1994) (英文)」で、これに関わった幼虫同定の手引きや解説も多く出されています。また、昆虫全体を扱った図鑑の執筆や出版にも携わるなど、昆虫の業績を数多く残されました。また、昆虫から離れた考古学の分野においても研究成果も残されています。先生の業績は多く、ここでそのすべてを取り上げることはできませんが、先生がお亡くなりになる直前に、ご息女とお孫さんに先生が託され、1つの冊子にまとめられた記述目録（前出）がありますので、詳細はそちらをご覧くださいと思います。

先生が生涯をかけて収集された甲虫類の標本は、ご自宅にインロー型標本箱（中型・大型あわせて95箱）と、幼虫などのアルコール液浸標本（中瓶・大瓶あわせて311瓶）が保管されておりましたが、ご家族の意向で、前者は東京農業大学厚木キャンパスの「農の博物館」に、後者は同大学昆虫学研究室併設の標本室に寄贈され、共に同研究室により管理されることになりました。また、先生が収集された文献やその他の資料も東京農大に寄贈され、今後利用可能になります。なお、先生が学位論文をまとめる際に用いた幼虫標本やシバ

シバ3種のホロタイプ標本は、これまで北海道大学農学部で管理されておりましたが、現在は北海道大学総合博物館に移管されています。

林長閑先生は、私にとって大学の昆虫学研究室の大先輩にあたりますが、同じ甲虫屋ということもあり、学生時代から親しくしていただき、長い間ご指導を賜りました。法政二高で非常勤講師をしていた私に、専任にならないかと声をかけてくださったのも就職の口がなくぶらぶらしていた私のことを心配してくださったのでした。そこには、ここなら先生がされていたように虫の研究ができるはずだ、とお考えになられたのだと思います。そのような先生の思いに応えられず、追悼文という形でしか恩返しすることができなかったことを、腑甲斐なく思っています。最近になりコマツキダマシの幼虫について強い関心をもつようになりましたが、そのような折、先生の訃報を知り、「もっともっと幼虫のことをお訊ねしておけば良かった」と残念な気持ちでいっぱいとなりました。

日本における幼虫研究の先覚者を失ってしまったことはとても大きいですが、バイブルともいえる業績を先生は多く残されましたので、今後は多くの研究者が育ってくれると確信しています。先生、お疲れ様でした。ご冥福をあらためてお祈り申し上げます。

末筆ながら、追悼文の執筆のために、先生に関するいろいろな資料をお調べいただいたご妻女の林新緑さんとご息女の飯島朱美さん、標本資料についてご教示いただいた東京農業大学の小島弘昭博士、北海道大学総合博物館の大原昌宏博士、そして愛媛大学ミュージアムの吉富博之博士に厚くお礼申し上げます。

（鈴木 互 法政大学第二高等学校生物科）